

# 1 解表剤

## 定義

発汗、解肌、透疹等の作用により、表証を解除する方剤を総称して解表剤という。表証とは主として外感病の初期に現われる病症で、発熱と悪寒が同時に見られ、浮脈を呈し、舌にはわずかに薄白苔が見られるのが特徴的症候である。

原典『素問』（1）、「ソノ皮ニ在ルハ汗シテコレヲ発ス」（陰陽応象大論第五の23節）表証の治療原則は発汗法である。

（2）「善ク治ス者ハ皮毛ヲ治シ、其ノ次ハ肌膚ヲ治ス。其ノ次ハ筋脈ヲ治ス。其ノ次ハ六府ヲ治シ、其ノ次ニ五臓ヲ治ス。五臓ヲ治ス者ハ半バ死シ半バ生クルナリ」（陰陽応象大論第五の19）

発汗法は、汗、吐、下、和、清、温、消、補の八通りの治法の首位に来る治療法である。

『傷寒論』（1）「太陽病、発熱、汗出デ、悪風シ、脈緩ノ者ハ名ヅケテ中風ト為ス」（太陽病上篇）第2節

（2）「太陽病、或ハ己ニ発熱シ、或ハ末ダ発熱セザルモ、必ズ悪寒シ、体痛シ、嘔逆シ、脈陰陽共ニ緊ナル者ハ、名ヅケテ傷寒ト為ス」（同）第3節

（3）「太陽病、発熱シテ渴シ、悪寒セザル者ハ温病ト為ス」（同）第6節

以上より傷寒論には、太陽病の経病（外感病の初期）に基本型として中風、傷寒、温病の三つがあることが示されている。

表1、中風と傷寒の初期の病症の比較

病証	原因	病態	虚实	一般症状	汗	脈	特徴的症狀	基本方剤
中風	風邪	營衛不和	表寒虚証	軽い	自汗	浮緩	悪風	桂枝湯
傷寒	寒邪	衛気閉塞	表寒実証	重い	無汗	浮緊	身痛	麻黄湯

表2、傷寒と温病の初期における証治の比較

病証	原因	熱感	悪寒	頭痛	口渴	舌質	舌苔	脈	小便	治法
傷寒	寒邪	軽い	重い	重い	なし	正常	白薄	浮緊	正常	辛温解表
温病	温邪	重い	軽い	軽い	あり	舌紅	白薄	浮数	微黄	辛涼疎表

温病は太陽病に属するとはいっても、傷寒とは異なっている。傷寒は皮毛から入って足太陽膀胱経脈を侵すが、温病は多く口、鼻腔から入って手太陰肺経脈を侵襲する。また傷寒の原因である寒邪は陰邪であって陽を傷つけ易く、温病の原因である温邪は陽邪で陰を傷つけ易い。

解表剤には大きく分けて傷寒系の表寒証に対して用いられる辛温解表剤と温病系の表熱証に対して用いられる辛涼解表剤とがある。

『素問』至真要大論第七十四

「風内ニ淫スレバ、治スルニ辛涼ヲ以テシ、佐クルニ苦ヲ以テシ、甘ヲ以テ之ヲ緩シ、辛ヲ以テ之ヲ散ズ」（第5節）

「寒勝ツ所ニ淫スレバ、平スルニ辛熱ヲ以テシ、佐クルニ甘苦ヲ以テシ、鹹ヲ以テ之ヲ瀉ス。」（第6節）

## 1) 辛温解表剤

### (1) 表寒虚証用方剤

**桂枝湯**（漢方常用処方解説2頁参照）

組成

桂枝、芍薬、大棗、甘草、生姜。

病態

営衛不和、風邪による太陽中風。

症状

発熱悪風自汗脈浮緩、舌は正常（緩脈とは、脈拍が毎分65位で遅脈には至らないもの）。

治療

営衛調和、肌表の風邪を解除（解肌）する。

臨床応用

カゼ症状の極く初期（鼻カゼ）や病後、微熱や自汗があり気分が秀れぬ場合。

方義

本方は桂枝で発汗解肌、芍薬でよく陰を和し、姜棗もまた裏を和すので、外感病に対する発汗解肌の基本方剤だけではなく、病後、産後或は数々の原因により営衛不和となり、微自汗、有熱、あるいは微悪寒等の症状を呈する者に広く応用される。

『本草綱目』麻黄の項「麻黄ハ衛実ヲ治スルノ薬、桂枝ハ衛虚ヲ治スル薬ナリ。二物太陽証ノ薬ト雖モ其ノ実ハ営衛ノ薬ナリ」（好古）「傷寒汗無キヲ治スルニハ麻黄ヲ用イ、汗有ルハ桂枝ヲ用ウ」（李時珍）とある。

桂枝湯の禁忌（太陽病上篇）

「桂枝本解肌ト為ス。若シ其ノ人脈浮緊、発熱シテ汗出ザルハ之ヲ与ウベカラズ」

この場合脈浮緊、不汗であるから麻黄湯証である。

「若シ酒客病ハ桂枝湯ヲ与ウベカラズ、之ヲ得レバ即チ嘔ス。酒客甘ヲ喜バザルヲ以テノ故ナリ」

酒客は湿熱が内鬱している。桂枝湯は辛甘温の剤であるから湿熱に対しては逆治になる。

### **麻黄附子細辛湯**（漢方常用処方解説 1 4 頁参照）

『傷寒論』「病、発熱有リテ悪寒スル者ハ陽ニ発スナリ、熱ナクシテ悪寒スル者ハ陰ニ発スナリ」（太陽病上篇の第7節）陽病、陰病の定義

「少陰病始メテ之ヲ得、反テ発熱シ脈沈ノ者ハ麻黄細辛附子湯之ヲ主ル」（少陰病篇）

「少陰病之ヲ得テ反テ発熱」するのは太陽の病証があることを示す。「脈沈」で少陰病の病証であることを示している。老人や